



妙義赤城榛名の三山ハ我ハ上州にあつて山
 の尤なるものなり而して妙義ハ奇巖重疊一
 見懦夫の心膽を寒あらしむ赤城ハ泰然國士
 の姿ありて見輕薄兒をして覺へず襟を斂め
 のハ夫れ榛名乎剛柔其度を失するの徒之を
 仰て赧然たらざる者なけん利根川ハ上州に
 於て川の大なるものなり幽嶺以東第一と稱
 す坂東太郎の名の由て來る所なり我が上州



の名士と稱するもの此名に對し後へに嗟若
 たらざるものハ蓋し少なからん
 山水秀靈の氣凝て英傑を生ずと此語若し是
 ならば山水秀靈なる我が上州の如き亦幾多
 の英傑を生せざるの理あらんや
 嗚呼三山鼎立して各々天然の風致を存し巍
 然雲間に聳へ名聲上州に轟く利根川ハ坂東
 太郎と稱せられ聲譽關東に冠たり此間に棲
 息して萬物の靈長と自稱自傲する蒼生七十
 万口ハ如何名聞上州の地に鳴り鐵腸自ら持

するもの幾人ぞ名聲關東に雄飛し其量や宏
 く其豪は以て百世を風靡するもの果して幾
 人かある政治團體には自由黨あつて其鳴號
 するや實に天下に率先す如今自由黨中に在
 て一身國家に委するもの幾人ぞ昨廿五年東
 洋自由黨起るや之れが創立に率先盡力する
 もの亦上州の地に屬するもの多し而して今
 尚ほ黨務に盡瘁する有爲有望の士幾人かあ
 る
 熟ら既往の事例に徴するに我が上州當今の

士ハ誠に斷に勇なり然れども此斷や輕進輕
 激一時の感情に馳せ前後左右を考慮するの
 量なきもの多きに居る加ふるに堅忍持久の
 勇に乏し嗚呼今の上州の士が一州だに將た
 關東だに赫々たる聲譽なき所以のもの抑も
 以へなくんばあらず見ずや高山先生の鐵腸
 と耐忍持久の勇ハ今に至て神州男子を泣
 しむる所以を憶今の上州人たるもの先生の
 遺靈に對し將た又上州山川の風致が千古依
 然たるに對し慚然たるならんや吾輩謏劣

を顧みず敢て此篇を草し微意を述ぶる所以
 のものハ蓋し當今の上州が上州的大人物を
 要する切なるを爲め之れか養成の一助とも
 ならんを欲してなり
 茲に謹て先輩及び同志の諸君に此篇を呈す
 覽觀を賜はゞ幸甚

明治二十六年七月

吾川 木檜三四郎識

上州概書

上州先輩の言動

當世先輩の言動多くハ時勢の便宜情實
依據する所を知らざらむる如き誠に慊

焉たるもの少しとせず吾輩篤と雖とも身を
以て國に許す者敢て先輩の驥尾に附して國
民の分を盡さんご期す從て先輩の言動に重

木曾三四郎著

きを置かざるを得ず故に昨年高山先生紀念會の催あるに當り聊ち先輩の舉を議し教誨を請ふ所以のものハ豈先輩の一舉手一投足を重んずるの致す所にあらずして何ぞ然るに先輩福田氏の如きハ罵詈の答辯を放て釋然人の疑惑を氷解せしむるの途に出でず乃ち吾輩は其妄を辯して再度の指教を俟つこと數日而して福田氏一言を與へず百有餘名の先輩亦黙して言はず嗚呼之れ問ふ者の罪か問ふ者の道宜しきを得ざるに因るか問ふ

者の地位卑きが爲める事實小なるを爲る將た答ふる者時務に繁多なるが爲る必ずや重き理由の存するありて然らん吾輩謏劣今に及んで之を解する能はざるなり
異境に流離して途に行き暮れたる旅客に對してハ人間の同情ハ必ず一宿一餐の憐情を分たざるものあらんや蓋し人の零丁困苦を憐む所以の者ハ人類の至情之をして然らしむるなり家族朋友の圓滿ハ苦樂を共にするに因て全く先憂後樂の念ハ忠誠の國士に於

て之を見る故に愛國の志あるものゝ親和の同情家族より郷黨に郷黨より國家に及ぼし以て舉國苦樂を共にするにあり同情や苦に在てハ義氣となり復た俠氣となる嗚呼此義氣俠氣の語ハ如何に吾輩上州人の先天的遺傳性を刺撃する者ぞ吾輩此語に接する毎に嗜乎として轉た今昔の感に堪へざる者あり世を擧げて土百姓素町人と稱呼せらるゝ時に當て上州ハ獨り義俠の心に富々然諾を重んずるの志士輩出し義氣俠氣の文字は直に

我上州人を意味するものゝ如くなりし之を忠臣に覓むれば新田公の如き高山先生の如き皆是れ鞠躬如として一身を擲て國難に殉したる者に外ならず國家必須の材たりし所以豈に偶然ならんや獨り怪訝に堪へざるハ今の上州先輩の士なり吾輩嘗て進化論者に聽く人ハ多く其性質を父母に受くと若し之をして眞ならしめば古上州人の精血を受けたる今日の上州人ハ何ぞ振ハざるの甚だしき高山一百年紀念會發起者として先輩の士

百有餘名列記せらるゝ中に在て殊に奔走の
勞を取られたる有識の士福田君が吾輩を反
駁せる辭中に謂へる如く「血性」ある人情を有
し苦樂をともにする上州人たるに恥ぢずん
ば何ぞ吾輩後進か辭を卑ふして教を請ふに
當て赤心を以て人の腹中に置くの途に出て
ず慢罵輕侮を加ふるの甚だしきや既に他邦
人すら異郷に彷徨せし何處の人と雖も親切
に東道の勞を取るを辭せざるは人情なり況
や同郷にして殊に先進後進の關係あるに於

てをや若し先輩の意にして他を稱して先生
と云ひ君と云ひ自らを稱して僕といひ妾と
いふる如きは古へ弱者が強者に媚びて起り
たるものなるが故に今日の開明に於ては古
今人の差なく賢不肖の別なく人を呼ぶ皆捨
て辭を以てすべし高山彦九郎先生を彦九と
いふ所以爰にありと謂はば何ぞ殊更に澆季
の世に於て人心の汚腐を洗滌せんか爲めに
先生の靈を九泉の下に喚起するを須ひんや
抑も人心の汚腐は道心の缺くるより起る道

心の缺くるハ秩序の亂壞よりす秩序の亂壞ハ倫常の壞敗に基く然らば則ち先生といひ君といふ固より其字源を糺さば卑陋甚たしき者在べしと雖も今ハ之が倫常の一端を維持する所の敬禮の辭たるに於てハ特に敬稱文字の使用を今日に廢棄するの要やある吾輩不學畢に先輩意思のある所を解するに苦しむ而して吾輩の忠言ハ遂に容れられず左に當時の始末を載す蓋し此事今日に贅して益なきあ如しと雖ども既往の事實は滅す

へからず故に敢て先輩諸君の判断を請ひ併せて將來上州の地に再び這般のことなあらしめんことを欲してなり蓋し完あらんことを君子に求むるの意豈他あらんや

故高山彦九郎一百年紀念會を興すの檄

我をわれとまろしめすかやすめらきの玉の御こゑのかゝるうれしさ。儘に是三十一字、三條橋頭遙に天關を望んで草莽之臣正之と絶叫したるの態、今猶躍々乎として眼前に横はるを覺ふるにわらすや。爲我報海内豪

傑好在而已。僅に是一語、餘音鏗鏘として百載の下尙吾人の耳朵を裂くの慨あるのみならず併せて彦九當年の死、決して偶然にあらざるを想はしむるにあらすや、嗚呼今茲壬辰の歳は實に我高山彦九郎の一百年忌辰に丁れり吾人上毛の志士たるもの豈之か爲に相共に紀念の意を表せすして可ならんや、聞く西筑久留米の有志及び我新田郡高山神社等既に之か爲に祭祀の典を挙げたりと、然れども是固より一邑一郷に於ける儀式的祭典たるに過ぎず我上毛全州の志士義人たるもの將た何を以て之を紀念せんと欲するか、是吾人か不肖を顧みるに違わらず自から卒先して斯紀念會を興

さんと欲する所以なり、請ふ首を回らして方今の形勢を顧一顧せよ、名奔利走の徒所在相牽ひ頻りに黨を樹て朋を造り公を掩ふに私を以てし眼中復た國家民人あるを知らず空論泛譏離亂擾々遂に國家を沈淪の境に致さ、れば已まさらんとす、想ふに彦九を九原の下に喚起して今日の状態を見せしめは知らず如何の泣を爲さんとするかを、嗚呼彦九は實に國士無双なり彦九の實に報國盡忠の士あり彦九の實に外夷陸梁の間に於て巍然として日本帝國を卓立せしめざる可らざるを念じたりき彦九の實に天下の憂に先つて憂ひ天下の樂に後れて樂むとを忘れさりき。嗚呼我上毛全

州の眞男兒たるもの若方今の事、日に非あるを慷慨するわらは亦以て彦九の當年を緬想追懐する所なくん
 りある可らず、時維れ高秋、鉄馬霜に嘶き、餓狼月に嘯く
 の候、刀水の風浪は轉た悲壯の聲を加へ、榛嶺の紅楓は
 將に爛斑の色を添へんとす、恰も好し天長の大節を期
 し、遊て旣城の招魂祠畔に張り以て彦九在天の靈を招
 き、共に輿に隔世の憂を頰たんと欲す、亦可ならずや、來
 れ上毛全州の眞男兒、盡る來つて其平生の磊塊を他の
 英魂毅魄の前に向つて傾倒せざる、嗚呼臂を亂世に擲
 く、必しも亂を救はず腕を治日に扼す、或は以て治を裨
 く可きなり

明治廿五壬辰歲十月

發起者 (いろは順)

- | | | | |
|---------|---------|--------|--------|
| 石川 彦太 | 石坂 雄吾 | 伊藤 眞英 | 今井 今助 |
| 五十嵐 豊太郎 | 五十嵐 義太郎 | 蓮沼 吉術 | 星野 銀治 |
| 星野 傳七郎 | 細野 次郎 | 細野 左右二 | 豊國 義孝 |
| 鳥山 志良 | 徳江 八郎 | 千輝 仙藏 | 大島 染之助 |
| 大館 嘉門 | 岡田 謹吾 | 岡田 三郎 | 大屋 半一郎 |
| 大竹 勝術 | 金井 貢 | 神谷 榮吉 | 勝山 牧二郎 |
| 金谷 權三郎 | 竹内 鼎三 | 高橋 庄之助 | 高橋 周禎 |
| 高津 仲次郎 | 田中 甚平 | 高山 幸男 | 高山 織三 |
| 高山 守四郎 | 高山 茂樹 | 田島 善平 | 田島 武平 |

田島彌平	武孫平	反町覺彌	角田喜右作
都築兼吉	長坂八郎	長山新四郎	武藤道齊
向井周彌	生形柳太郎	野村藤太	野口茂四郎
黑崎長左衛門	久保田健次郎	保岡亮吉	矢島八郎
山口六平	山本三四郎	山崎泰輔	八木始
真下珂十郎	松井八十吉	前川虎造	真庭澳之助
福田和五郎	伏島真一郎	藤生高十郎	藤井新兵衛
木槍仙太郎	木暮松三郎	木暮武太夫	小島文六
小柴重太郎	澁美貞幹	新井善教	天野宗忠
阿久津盛爲	青柳新米	新井清兵衛	新井毫
佐藤善愷	笹治元	佐藤晋祿	佐々木一二

澤浦重次郎	櫻井傳三	木呂子退藏	湯淺治郎
三俣素平	三俣愛策	宮崎有敬	宮口二郎
下村善右衛門	篠原叶	塩谷五十足	清水永三郎
白石錦之助	白石好	島田重作	志村彪三
上毛新聞社	上州社	新群馬社	本島自柳
廣幡亮充	茂木要二郎	森村熊藏	森村堯太
關農夫雄	關口貞作	關口六合雄	鈴木祇

特別賛成者 (5乃は順)

今村研介	磯谷冽	伊東昌春	岩倉具定
新田俊純	星野長太郎	千谷敏徳	小田切秀繼
落合直文	大石保巳	大東重善	渡邊國武

勝安房	香川敬三	楳取素彦	金井之恭
川田剛	加藤信存	龜山直秀	横尾純喬
吉村發謙	吉川直簡	竹内直養	谷干城
副島種臣	中村元雄	中島平三郎	中野二郎
中野協藏	内藤耻叟	中岡菰	野澤房敬
久保山米僊	安川繁成	矢島行康	丸山作樂
福岡孝悌	藤井三郎	深谷徳三郎	福原三箴
福田辰五郎	古山四郎	兒玉春房	國分高胤
小山正武	秋元興朝	安藤謙介	雨宮克
佐々木高行	佐藤新正	櫻井郁二郎	宮下俊吉
柴四朗	島田宗正	東久世通禎	樋山資之

杉本重遠 杉浦重剛 菅谷正樹 鈴木捨三
鈴木天眼

紀念會次第

- 一、十一月三日、午前九時を期し、前橋招魂社前に會集する事、附たり代參者を新田郡高山神社に派遣する事
- 二、全午前十時より祭典執行の事
- 三、右了りて後祭文朗讀、演説等有志者の隨意たるへき事
- 四、右了りて酒樽を開き行厨を供する事
- 五、午后、遺物展覽會を臨江間に擊劔會を其庭前に催

ふす事

六、黄昏、天皇陛下萬歳を三呼して會を撤する事

注意

- 一、當日の式場には 皇后陛下の彦九郎に就ての御製(東久世伯の揮毫)を正面に掲げ久保田米僊氏の快筆に成れる彦九三條橋上泣拜の圖、勝伯東久世伯副島伯佐々木伯掛取男國分高胤氏落合直文氏内藤耻叟氏杉浦重剛氏川田剛氏其他諸名士の詩歌祭文等を並へ掲ぐへき事
- 一、高山氏遺物所有の向は可相成十月三十一日迄に事務所へ宛て送附置きありたし尤も當日持參下

されても宜し皆當日の展覽會に陳列して參會者の縦覽に供すへき事

一、會費拾錢當日持參の事

一、來會者は可成十月卅一日迄に通知ありたき事

上州前橋東照宮前

明治二十五年十月

高山紀念會事務所

故高山彦九郎一百年紀念會發起者

諸君に質す

木檜三四郎

去る明治廿三年十月我 天皇陛下か忠臣孝悌の道顔れたるを愛ひさせ給ひ特に教育に關する勅語を下し

給へり臣民たるもの當時 陛下か教育勅語を下し給ふ所以を想起して誰か感涙に嗚咽せざるものあらんや

余輩は今回我上毛の幾多先輩諸君が十一月三日を期し高山彦九郎先生一百年紀念會を催さんとし上州上毛兩新聞に於て同志に告ぐるの檄文を見轉た感慨に堪へざるものあり其標目に故高山彦九郎一百年紀念會を興すの檄と掲げ文中に彦九當年の死云々彦九を九原の下に云々嗚呼彦九は國士無双なり彦九の實に報國盡忠の士あり彦九の實に云々彦九は實に天下の憂に先つて云々彦九の當年を云々彦九在天の靈を云

々どろの彦九と呼ぶもの八たひ思ふに是れ上毛の先輩諸君か、徳義の壞敗を慷慨し先生の犠牲獻身的の行為を想起し一は以て先生の威徳を表彰し一は以て當今人心の汚腐を洗滌せんと欲し爰に一百年紀念會を催すの意たるや炳然明かなり然れども其文中八たひ彦九と呼號するに至ては先生の靈を迎へんとする先輩諸君の敬意に違はざるなきか、嗚呼先生は實に上毛の一偉人にあらざるかり實に邦家の大偉人なり維新の大功業も遠く先生與つて力あるや明けし今先輩諸君は先生の靈を慰せんと欲し天下に檄するに此不敬の語を以てす嗚呼何る夫れ禮を失するの甚

たしき既に先輩諸君は當今名奔利走の徒あるを嘆し
 遠く先生の靈を迎へて道義の氣風を恢復せんとする
 にあり而して呼ぶに彦九々々を以てす是れ果して邦
 家の恩人に對するの道に悖戻するなきや曩に我 天
 皇陛下既に其功業を賞揚して贈正四位を以てせるに
 わらずや

我上毛人たる者常に先生を師とし學ひ以て天恩に報
 すへきなり先輩諸君は一百年紀念會を起すに當り先
 生を呼ぶに彦九と謂ふ余輩は其可なるを知らざるな
 り今俗間に於ける彼追悼會紀念會を見るも皆某君追
 悼會某君紀念會と云ふ獨り其子孫等の舉行する者に

於て其名のみを呼ぶを見るのみ俗間に於ける斯の如
 し先輩諸君の先生の子孫にわらすして單に先生を追
 慕して止まざる者たるに過ぎず然るを何ぞ彦九の捨
 辭を以てする抑も何の意や余輩は生平先生の忍耐
 先生の剛氣先生の忠節を慕ふて已まざるものなり發
 起者先輩諸君も亦余輩と意を同ふし遂に這般の會を
 起すに至りしからん既に余輩と同しく先生を敬慕し
 敢て先生を奴僕視せずとせは何を以てか贈正四位高
 山彦九郎先生を呼ぶに彦九の捨辭を以てする抑も亦
 何の意をや論者或は言はん先生と云はす君と云はす
 して彦九と呼號する所以の者の其愛情の深さを表す

るに出つと余輩未だ此理を解する能はざるかり
 嗚呼我 天皇陛下は教育勅語を下し給ふ所以の者の
 亂倫敗徳の弊を除き忠臣孝悌の道を躬行實踐せしめ
 んとするにあり然るに何ぞ幾多先輩諸君好んで先生
 に對するに不敬の辭を記して一百年紀念會の檄を傳
 ふるものろ發起者諸君の中に代議士あり縣會議員
 あり新聞記者あり官吏あり碩儒あり神官あり教育家
 あり實業家あり徳望家あり皆これ社會の上位を占む
 るの士而して這般の事あり思ふにこれ別に道理の存
 するものあらん然れとも余輩不文之を解する識なし
 以上縷述する所の者幸に先輩諸君の一顧と其教誨と

を蒙り余輩と共に疑を同ふする者の隙を開かんと欲
 するの微衷に出つ余輩固と黃口措大の身敢て先輩の
 舉を議す事非禮に似たりと雖とも而かも知て之を言
 はずんは道に於て不忠なり又先生の靈に對して不敬
 なるを知る伏て希くは先輩諸君余輩の微意を察し其
 言を嘉納あらんことを

木槍三四郎に答ふ

福田和五郎

故高山彦九郎一百年紀念會の檄文中何等不敬の意あ
 るか何等不遜の辭あるか讀去り讀來りて唯た一片の
 赤誠を見るのみ豈復た他あらんや嗚呼大丈夫直ちに

血性を據へて天下に向ふ尊章摘句は抑も末のみ虚のみ若し夫の彦九々々と八たひ呼捨てにせしの故を以て不敬とか無禮とか難するに至ては是れ實に憐むべき笑ふべき小兒の見のみ試みに古來の歴史傳記等の正しき者に就て見よ上は至尊より下は田夫に至る迄唯其名を有の儘に稱呼するを見る必しも先生様、殿、君等の稱を須ぬさるなり獨り是のみならず古來隨分偉人傑士を紀念するか爲め羽檄を飛ばしたる例もあれど未だ曾て其氏名を有体に呼ひしの故茲以て敬意足らずと爲して非難せし者あるを聞かす要するに斯かる章句文字の虚飾に拘々泥々として而かも仰々敷新

聞紙上などに投書して見るか如きは却つて高山彦九郎を紀念せんとするの志に背くのみならず抑も彦九の心事を知らざる乃嘲を免れざるへし彦九地下に在て若し足下の喋々するか如きを知らは彼れ必ず叫はん咄々書生俗吏時務を識らず正々として邊幅を修飾するは我が最も厭ふ所なるを知らすや」と余曾て足下を頼しき少年と思ひたりしに今尙斯かる事に喙か容れたきや惜むへし足下須らく今一步脚を濶ふし今一着眼を高ふせし蓋し思ひ半はに過きん余復た多言するを須ぬす

附白足下若し繰合せが叶は、徒らに新聞上に虚名

を街ふことなとの止めて直ちに來つて余の胸臆を叩けよ余は快よく胸襟を披ひて足下と談すへし余は今鹿城の招魂祠畔に在り

福田和五郎君に答ふ 木檜三四郎

嚮に教を先輩諸君に請ふや君其非禮にあらざる所以を述へて曰く大丈夫直ちに血性を據へて天下に向ふ尋章摘句は抑も末のみ慮乃み云々思ふに古より血性に任して事を處するもの多し血性固と男子の尊ぶ所ありと雖も其極遂に無謀となり非禮となり妄断とあらざるもの稀あり故に有職の士は常に其前後に願み

て事体を誤らざるを勉む苟も國家忠烈の士を祀らんとす已に崇敬の念より生せざるへからず崇敬の念より出つるの擧たれば血性前後を顧みるの違あしと謂ふを得る乎

其八たひ彦九の捨辭を用ゆるを以て不敬非禮なりとして難するものあれ目するに可憐の小兒を以てし甚たしきは歴史傳記に於ける人物の稱呼を引用して羽檄の類と混するの愚に陷るは賢明なる君の爲めに千慮の一失あらん乎

歴史傳記と雖も其の天皇と云ひ帝と云ふ皆是至尊に對する固有の敬稱文字たるを知らざる乎

今回の擧の世道人心を扶植せんと欲するに非らずや道の振興を計る宜しく道を以てすへし非禮の擧竟に高山先生を待つ所以なる乎

若し君の謂ふ所を以て是なりとせば師父の間に用ゆる敬稱の如き凡て捨辭を以てする猶ほ破落社會に於て八熊と呼稱するを貴ふ乎

嗟呼國家忠烈の士を待つに口を血性に藉り敢て非禮の擧を異まさるものあるに至ては夫れこれを何とか謂はん

新聞紙は常に輿論を開通するの機關たり各人の意見亦此機關に依て發表せらる余は百餘名の發起者諸君

に一々教を請ふの煩を避け此近道を取りて意見のある所を述べたる迄かり目して虚名を銜ふと爲す者の小人自己の心を以て他人を忤度するの類乎
頼しき少年云々の如き余は君乃御目鏡の違ひたるを幸ひとす

日本新聞嘗て辭禮に關して左の數語あり之れ吾輩の意を得たるものなるを以て轉載す

○辭禮を謹めよ 徳一世に高く識千古を空ふする達人高士を稱呼するに當ては其辭禮の諛諛に陥らざるを避くる外は可成尊敬禮を盡くすを要す例へ

は諸葛亮を呼ぶに隆中の臥龍先生と謂は、亮の如何ある人物あるやを詳悉せざるの徒も亦胸中多少の尊敬を湧出するに足る者わらん然るに若し南陽の荷鋤夫又は擔畚夫かど謂は、亮の人と爲りを知悉するものと雖も何となく悪感情を發するの思ひ起るにわらずや氷川の老伯を呼稱するに頑辭老伯を以てし其の他伯か談話の際に於ける病狀を描出するか如きハ決して長者を寫すの辭禮にわらず無意の記事たるは知るに足ると雖も記事の品調賤むへきものあり謹まざるへからず

上州の先輩ハ夙に明治の御世に於ける藩閥の弊を嫌ふ思ふに此弊たるや閥族の眼中藩閥あつて國家なきが故ならん然るに藩閥を非議する先輩の士が社交の上に於て先進後進の間に墻壁を立つるが如きを見吾輩大に惑ふ先進後進互に扶助提携して始めて國家の利害を談ずべし其交情や財を以てするにあらず色を以てするにあらず炳たる一線の道光あるのみ故に財盡き花落つるも其愛ハ渝はらざるなり上州先輩の士たるもの能く

此交情を以て後進子弟を誘導提撕せざるべ
 ろらす特に吾輩が希望する所の者の先輩の
 士猥に後進子弟を黄口視せずして懇切なる
 誘導と親密なる會遊をなすこと是なり然る
 に當今先輩の士ハ之れを誘導し之れと會遊
 するを避くるものと如し殊に吾輩ハ代議士
 に於て之を見る抑も代議士ハ縣下の衆望を
 負ふて一國議政の局に當る者其責や重く其
 任や大なり従て輿論の木鐸一世の矜式とな
 り後進子弟を誘導するの責亦免あるべから

す爰に吾輩ハ上州選出の代議士ハ如何に輿
 論を代表せしやを論ぜず唯衆望を負へる代
 議士が吾輩後進に對する如何を見んなり
 我上州選出の代議士ハ後進の士と一堂に相
 會し共に快談壯話を思むものゝ如し現に東
 都にある後進子弟が催す會合に見よ後進之
 れに臨席を請ふや言を左右に托し逡巡漸く
 にして其請を納れ期日に至て一片の書もて
 欠席を通ずるあり甚だしきハ請を納れて出
 席もなく又一片書だにも與へざるものあり

如何に後進に對する一小事實なりと雖も其然諾を輕んずるも亦甚だしと謂ふべし若しも代議士にして國事多端なりと謂ふにあらば猶恕すべし而かも議會開會に際し國家重大の議日程に上るも靦然故山に起臥する代議士もあり嗚呼悠々として家國の大事を抛擲し又後進を顧みるなく漫然一家の私事を斷ず之れをしも代議士本然の職を完ふしたるものと謂ふを得べきや若し政見の行はれざる爲め故山に起臥すと謂ふにあらば斷然

身を退て其高潔を示すに若かず何ぞ區々として代議士の榮職に戀々たるを要とせん殊に後進をして其言動を誹議せしむるが如きに於てハ遂に先輩たるの徳なき者焉ぞ後進の模範たるを得んや
 回頭一番我上州進歩の有様に就て觀よ其多くハ先輩の意向に従て進歩するの跡を見る即ち碓氷が數年前教育上に於て首位を占めしを見る先輩に新島氏の如き湯淺氏の如き教育に熱心なるあり桐生地方の後進の國語

に妙を得るを見先輩にハ文學博士黒川眞頼氏の如きあり澁川地方の後進か堀口藍園氏の門に入り于今其徳を慕ふて其の人たらんを期す又實業に堪能なる先輩に従ふ者ハ實業を以て崇とする後進の俊髦を出だす故に後進の先輩に於けるは恰も水の器に従ふか如きなり若し吾輩の言を疑ふものあらバ各郡市町村の紛擾平和の實際に徴し以て其の先輩の言動に糺さば思ひ半に過ぎん吾輩は爰に其例證を避く

躬行實踐以て地方の風教を正ふす之れを郷先生と云ふ郷人皆其徳に化す今の上州先輩其の郷先生たるもの幾人ぞ其の多くハ胸中濶大の量なく偏癖にして輕進此弊や延て後進を誤らさるものハ少し今の後進たるもの何れに適歸して其徳を受け道を求むべき乎嗚呼後進を殘賊する者ハ畢竟先輩の罪に坐する豈少々ならさらん哉世人稱して上州後進の士ハ輕佻浮薄爲すに足らずと謂ふ是れ先輩の徳以て後進を感化

する能はさるか爲なり今にして大に矯弊の責に任じ以て後進の士を善處に誘導せざるへあらず然るに計爰に出てず蟄居屏息只管獲得したる地位を失墜せざるを之れ勉む偶々後進の士行て迎ふるも出てす又教を請ふも應せず噫之れ先輩の士あ後進に對する道と謂ふべき乎

然りと雖も先輩の士あ後進の前途を憂ひて劃策實行せしもの少しとせず中學校位置移轉の如き其の重もなるものなり故に此事に

就て聊か摘記して先輩の美譽を明あにす前に上州の先輩相謀り中學校の位置を赤城山麓小暮村に移す其の意蓋し此地ハ僻陬にして交通不便なれハ學生をして驕奢の風に感染するとなあらしめ自然勤儉の田舎風を失はしめす世に謂ふ天真の美果を結はしめんあ爲めならん吾輩ハ斯校舍に入て懇切なる教を受け質朴なる遊戯壯快なる散策に身を委ねしことありしを以て此僻地あ幾何の功果を生ぜしあを記さん

中學の在る處ハ小暮村と稱し前橋市を距る二里餘誠に僻遠の地たるを免れず教師來るも住す可きの貸家なし故に特に官宅を設けて之れに供す又交際すべきものハ教師と學生の間のみ交際の天地ハ斯く狹隘なるを以て一方にハ道義的の制裁行ハれ一方にハ師弟の交情日に密なるを得たり思ふに之れ四圍の境遇か然らしめたるに外ならず此地壯遊を試むへきの地ハ赤城山嶺赤城の湖水赤城の牧場とす故に學暇を得るや遠き

ハ赤城山嶺或ハ湖水の邊或ハ牧場の在る處近きは芝生の原野又ハ松林を駈け廻ハるに過ぎす而して足疲るれば青氈を布き偃臥してハ彼の蒼を睥睨し箕踞してハ樹立繁き白松の晚翠を含むを見る孟子の所謂浩然の氣ハ這般の地に於て養ふを得ん山徑ハ崎嶇羊腸を極め車行通せず足に任せて健步せざるべあらす到底柔弱書生の踏破し得べきの地にあらす又筆墨紙日用の物品ハ土曜日の午

后より前橋町に出で購求し薄暮校舍に歸

るを常とす其の出門の有様は各々白布呂敷を背に負ひ股引或ハヅボン下を穿て揚々として前橋町に出て清水井勝山水戸屋等の諸店にて物品を購求し歸途其の奢るものハ赤城亭又ハ旭亭の牛肉に腹を膨くらし其の然らざるものハ町はづれに於て味噌附饅頭又ハ芋串を買ふて行く行く健談壯吟と晚鴉埒に歸るの頃白布呂敷と共に校舎に入る嗚呼前途多望なる學生當時の意氣誰れも壯絶ならずとせんや而して斯壯斯勇ハ唯不便なる

境遇が然らしめたるものにして知らず識らず獨立的の氣風を養生するものと謂ふべし此數者は實に中學移轉の爲めに生じたるものにして吾輩後進か謹て先輩に向て多謝する所なり

上州先輩の士ハ既に後進子弟の腦裡が單純にして動もすれば外物の誘惑を蒙り易きを憂慮し赤城山の麓小暮村と云へる地高く水清らかに住民純朴にして誘導惡魔の尠少なる土地を擇べり爾來後進が爰に學ひ星霜未

だ十歳に満たずして明治十九年俄然縣會が後進の頭上に廢校と云へる大恐慌を蒙らしめたる者ハ抑も何たる事ぞ從來中學の爲め校舎の修築植物園の新設或ハ練兵場の設置或ハ前橋よりの道路を脩する等夥多の民財を費し着々整理の途に就あんとするに際し廢校の議決を爲す嗚呼曩にハ校舎の移轉を決し今は廢校の議決あり其の無定見も亦甚だしあらずや而して

此廢校の議決ハ夥多の學生をして

失敗せしめたる一原因たり

廢校議決の爲め平素東都遊學を望むものには出京の機會を興へたりと雖も學費に乏しきもの又ハ子弟の前途を憂慮する父兄ハ出京を許さず之れが爲め恨を吞んで祖先の遺業を保守するのみにして空しく伏龍鳳雛の俊秀を可惜埋木とならしむるの不幸に遭遇せんとせり幸にして昊天斯の失望の子弟を捨てず西群馬の石坂氏小暮氏等の諸先輩中學の廢校を嘆し其の廢れんとするを興して

失望憂愁の子弟に喜色を呈せしむるに至らしむ嗚呼當時逆境に向て奔走せられたる先輩の盡力實に偉なりと謂ふへし
 翻て中學廢校に際し東都へ遊學したる學生を顧るるに彼等は未だ東都私學校の多くハ羊頭を懸けて狗肉を賣るの類なるを知らず漫然其の廣告の誇大なるに眩惑し行て其校舎を見長屋の片隅が教場兼教師の居間たるの類にして其の實射利山師的の者たるを知得するや轉校々々日も亦足らず加ふるに其

の交るの友は金あれば交はり金無ければ交はりを絶つ所謂金錢の友のみなれば終にハ金の爲めに身を誤り放蕩子となつて荏苒時日を空費し而して父兄ハ豫定年限の満期或ハ學費濫用より已むを得す成業の中途に召還し且謂へらく幾多の日子を要し莫大の貨財を費して東都に遊學せしむるも其失ふ所多くして其得とする所更に無し寧ろ郷里に在て實業に精勵せしめて祖業を守らしむるに如らず必ずや將來子弟を東都に學ばしむ

る勿れと世間亦以て是とし信す然れども當時京に出で、研鑽苦學して其目的を達したるもの大學に陸海軍に或ハ實業界に其他諸所に在て上州秀才の名を現はしたるものなきにあらざれども悲ひ哉郷里の父老ハ成功者の一方を見ずして後進子弟が遊學を請ふものあれば直に失敗學生の前例を以て之を非難するに止り未だ學生失敗の根原を考究して之に對するの途を講ずるものなし故に吾輩ハ爰に後進の進路を要塞する根原に溯

り父兄の爲めに參考に資せんとす

學生失敗の根原

學生失敗の根原たるや學校の良否、朋友の善惡等多々限りなけん然れども其主たり尤たるものハ學生の頭腦是れのみ若し其頭腦幼稚淺薄にして己が專修すべき科學を定むるに足らず又交友を擇ぶの識なく已れを知るの明なきもの飄然として東都學生の群に入るを見誰れか危険ならずとせんや
下宿屋樓上學生多く集散離合恒ならず故に

又交友同じあらず從て其の意向も異れり遇々相會して處世の方針を談ずるに到れば甲の言ふ環海の一帝國殊に海運の要路に當る宜しく商業を以て起たざるべあらず故に商業家たらんと乙の言ふ既に商業を以て將來に期せば海軍の擴張第一に居る故に海軍々人たらんと丙の言ふ我が邦今や代議の政を布く志偉に望大なる者の宜しく政治家となつて生平胸中に蘊蓄せる政策を實行すべきなりと其の面貌の異なる毎に異説を辨ず辨

ずる者の既に科を擇て其の門に入り或は入らんとして其の道途にあるものなり我田引水の勝手論の起るは當然なり然れ共爰に地方より突然入京したる學生中に思想單純にして其の頭腦ハ恰も水の如く方ともなり亦圓ともなる皆器の儘なれハ商業よし海軍よし政治家よし唯其の何者が已れに適するやを考慮するに違あらず故に交友が諄々として勝手論を縷述して勸誘する毎に動搖す或時は商業豫備校に或時は海軍豫備校に或

時の政治の學舎に其の他何其の他何と入學退學に忙はしく遂に父兄に約する年限に到達するも志業頓挫一もなるなく學費を蕩盡して歸來するに到る況んや四邊を圍繞するの魔物動もすれは導くに寄席芝居の遊散或ハ牛肉店蕎麥屋の一酌又花時にハ墨陀上野に杖を曳あしむ是等ハ皆放蕩學の端緒となり階梯となり學費の濫用となり流々轉々として遊子と爲り粹人となり遂に國元へ召還せらるゝの不幸に終る嗚呼此失敗を招て元

の木阿彌とならしめたるもの抑も誰れの罪ぞ思ふに此罪つくりと與て力あるものハ中學廢校に力ある先輩並に失敗學生の父兄なりと謂ふも誣言にあらざるべし賢明なる先輩の士にして輕々に廢校の議決をなせしものハ未だ中學の特色として一種重んずべきものあるを知らざるに依るならんも吾輩ハ深く之れを惜む中學校が中等教育を授くる所たるハ人の知了する所然れども他特に重んずべき自然的

教育を授くる所たるを知るもの稀なり此者や之れを内にしてハ一國の隆盛となり之を外にしてハ國權の擴張となる世之れを呼て元氣と謂ふ斯元氣ハ各國同じからず然れども未だ獨立の國民にして元氣なき者ハあらず本邦の如きハ三十餘年前封建割據の遺習よりして今に各縣の元氣同じからず各其の尤を以て天下に鳴る而して地方の中學ハ數百年來養成せる地方的元氣を間接に教養する所なり斯元氣の消長こそ一國の興廢に關

する大ならずとせず故に國權日に凌夷し國民猥に外を崇拜し一種尊重すべき不可動の元氣を忘却して自信自敬の精神なくば之れ則ち亡國の端を開くなり之れ憂國の士の警省して止まざる所なり
 顧へ本年一月彼の布哇革命起るや我が同胞移住者は此際布哇王國に一臂の力を貸すの勢もなく又此機に乗して權利の恢復或ハ國權の擴張に盡力する一主動者なきのみならず天涯異域に在て奴隸の境遇に蠢々として

了はる者一に日本人的の元氣なきに依る之を内地の各州縣に見るに幸にして未だ全く亡せず彼の薩州の如き薩州の元氣尙ほ存して其の州の面目を有つを得若し斯元氣なくんハ既に薩州は亡きなり又長州にハ長州の元氣あつて存す故に先輩の士ハ元氣養成に意を注ぐ彼の薩州の人士が宴席にあつて樂器として用ゆる琵琶に徴するも其音悲壯慷慨能く薩州人士の元氣に伴ふを見る薩州先輩の士が夙に元氣養成に意を用おたるや知

るべきなり又長州にハ嘗て吉田松蔭先生ありて一藩の俊髦を養成し松下村塾の元氣は今に至りて長人の間に殘存し此元氣消盡に歸するの日ハ長人已に天下になすなきの時にり此を以て見るも元氣養成の重んずべきや明なり

我が上州先輩の士ハ中學校廢止の議決を爲す不知上州的元氣に就ての高見如何論者ハ謂ふ襁褓時代より進で地方の小學を修業する間に在て業に既に其國の元氣を養成し得

たり之れを東都に遣はす不可なるなしと之れを以て千百人中一人に適應する可なり之れを一般後進の士に通ぜしめんとするに至ては誤謬の至り妥斷の極と謂ふべし然れども兒子が小學を卒はる迄に其地方の元氣に感染する固より大ならずとせず唯憾むらくハ斯元氣は此輩が思想に定見なきが如く容易に外物の爲に變り易く動き易き元氣なり殊に東都の如き學生の多きに準じて元氣同しあらず又氣風一ならず這般の地に思想薄

弱なる後進の士を放つ此輩が先輩の意を紹述する能はざるのみならず固有の美風良俗ハ忽ち他の汚俗惡風の爲めに狼呑せらるゝに至る論者ハそれ之れあるも上州の元氣尙ほ存すと謂ふあ而して廢校の議決ハ學生失敗の一原因に非らずと謂ふ乎
又中學校の議決より以來中學の經費ハ寄附金を以て維持するものなるか故に其經費裕かならず之れの影響は教師の良否に關するを以て學生ハ不平を起し寧ろ出京勉學の

可なるを父兄に訴ふるに至る父兄ハ其の地方中學の其の國の元氣及び徳性涵養に功あるを悟らす空しく其の請ひを納れ未だ其の子弟の頭腦如何を考慮するな故に其の薄弱なる頭腦は多く失敗を招くの因たり殊に少年の猥に出京することハ此時より其の備を作り一旦地方の中學に入らんとするものも志を翻して續々出京するに至り爲めに失敗學生は春草の膏雨に逢て發生するが如し幸にして良友の誘導あるもの纔に此難を免

あるに過ぎず之れ父兄が少年子弟に對し不注意の罪に坐するにあらずして何ぞ將來世の父兄たるもの宜しく此點に意を用ゆるを要す

嗚呼當時の先輩及び父兄が後進子弟に對する順逆を誤るや斯くの如し然れども事既往に屬し今ハ中學の校舍儼として利根の邊に聳つ法令亦校の廢止を許さず故に此記事たる無用に似たれども吾輩の微意一ハ地方中學の爲めに經費を吝む者に對し一ハ少年者

流の京地遊學の流行せるに對しものこたるに過ぎず蓋し先輩の士及び世の父兄が後進子弟を遇する順逆を誤るならんを望むの婆心に過ぎざるなり以上吾輩は先輩の言動に對する卑見一斑を述べたり之れより後進に就て聊ち一言する所あらん然れども吾輩亦後進の措大故に吾輩の觀察或は正鵠を失するなきを保せず讀者若し説に妥當を缺くあらば幸に指教を惜む勿れ

上州の後進

事に當て機敏伶俐なるもの上州の後進に多く見る、事に當りて倦み易く變り易き者も亦上州の後進に多きか如し宜べなり率先事に當るもの多くして功を奏するもの少し友を得る速かに友を失ふ速なるもの上州の後進に於て弊所たり交て親むこと速かに交て親しむを失ふこと亦速かなるもの上州の後進に於て又弊所たり宜べなり刎頸の友を有し管鮑の交を訂する者少し人と交はるに老成ぶり世才ぶるもの上州の後進に多し宜

べなり其の所謂「ぶる」の極ハ失敗せざる者殆んど稀なり
 上州後進の列にあるものハ斯弱性如何と三省するを要す若し其の倦み易き變じ易き「ぶり」過ぐるの三性を有するものあらは換ふるに堅忍持久と誠實眞摯の性質を以てすべし若し斯弱性を有するを悟りなら猛然として改むるなくんは後進實業家ハ轉業に日も亦足らず社會の信用ハ地に落ちん之れを學生にしてハ轉校に忙ハしく父兄朋友に對す

る信用ハ轉校毎に薄らぎ之れが爲めに幾多の學費を徒費するに至る又彼の大人ぶり世才ぶるは先輩に於て時あつて免れざれども前途多望なる後進に在て何の要ある却て「ぶる」が爲めに恭儉已れを持するを知らずして驕奢の弊を生じ遂に志を立て身を完ふすること能はざるもの古今其の例に乏しあらす吾輩ハ上州後進を擧て右の弱性を有するハ謂はず其の大觀に於てハ斯弱性を有するもの多きに居る吾輩の如き其の一人なり故

に生平克己の心を養成せんと勉むるや切なり吾輩ハ其長を長とし其短を短とし知て而して謂ハざるハ吾輩の本領に反す故に特に記して猛省を促すのと蓋し微衷黙すべからざるものあればなり
 曩に吾輩ハ先輩に告くるに聊ハ規を以てす後進たるものも亦其の分を守り躬行實踐せざるへあらす即ち後進實業家にハ後進實業家の分あり學生にハ學生の分ありて存す今の後進實業家及び學生ハ如何或者ハ豪富ぶ

り紳商ぶり或者は紳士ぶり學者ぶりて平然自得するものゝ如し錙銖を争ふの傍ら驕奢贅澤を極めんとす收支の宜しきを得ざるや明けし此輩が陶朱猗頓の富を得んとする抑も難矣哉又東都葢穀の下に行て上州學生の多數に接せよ一見するときには紳士たり學者たるを知て學生たるを悟る能ハす今の學生が多額の費を要する知る可きなり而して斯紳士風學者風の學生ハ講學の堂上に於ても「ぶるか故に知らざるも得々として物知り顔

をなす且つ此「ふる」の輩は疑問を爲すを好ま
 す疑問ハ疑問の儘なり何となれば疑問を出
 すハ己れの知らざるを表する者なれば疑問
 を出すを以て終世の恥と思惟すればなり此
 輩が廉恥を重んずべき正當の場合に莅て之
 を輕視し一種奇妙の場所に一種の廉恥を重
 んぜんどす其の心術も亦醜ならずや事情既
 に此の如し此輩が研鑽講究の足らざる當然
 なり業卒へて競争社會に起つや衣食に奔走
 し父兄をして前途を憂嘆せしむるのみ蓋し

後進あり其の道を誤り其の分を守らざるの致
 す所なり故に卒業後一旦獨立するに至るも
 從來父兄より支給せられたる學費を償ふに
 足らず父兄の脛をちりたる當時を追羨す
 るのみ世の父兄此に於てあり其意外なるに失
 望せざらんとするも得んや噫之れ何が爲め
 に然るあり思ふに以上列舉したる弱性を改め
 ずして暴進したるの結果のみ
 抑も父兄あり粒々辛苦より得たる財貨を子弟
 に送與するものハ種々の希望を以て子弟を

待つに由る然るに名を揚げ父母を顯す者實に稀にして父兄を養ふの資力だにも得る能はず徒に父兄を落膽の境遇に陥るゝものあり此の如きは是れ累を將來に及す者にして今の後進たるものゝ最も注意を要する所なりとす又是れ今の後進を將來の後進に對する責務なればなり特に警告すべきことハ上州の後進が大言壯語に巧にして實踐の之れに伴はず所謂腰骨の脆弱なるにあり能く虚勢を張るも實勢を張る能はざるの弊是れなり

上州の俠氣と云ひ義氣と云ふ皆是れ祖先の遺傳凝て而して發する者今の後進たるもの夫れ之を思ひ敢て祖先を辱かしむる勿れ

全 明治廿六年八月廿五日印刷
年全月廿九日發行

著者兼
發行者

木 檜 三 四 郎

群馬縣吾妻郡原町
三百二番地

印刷人

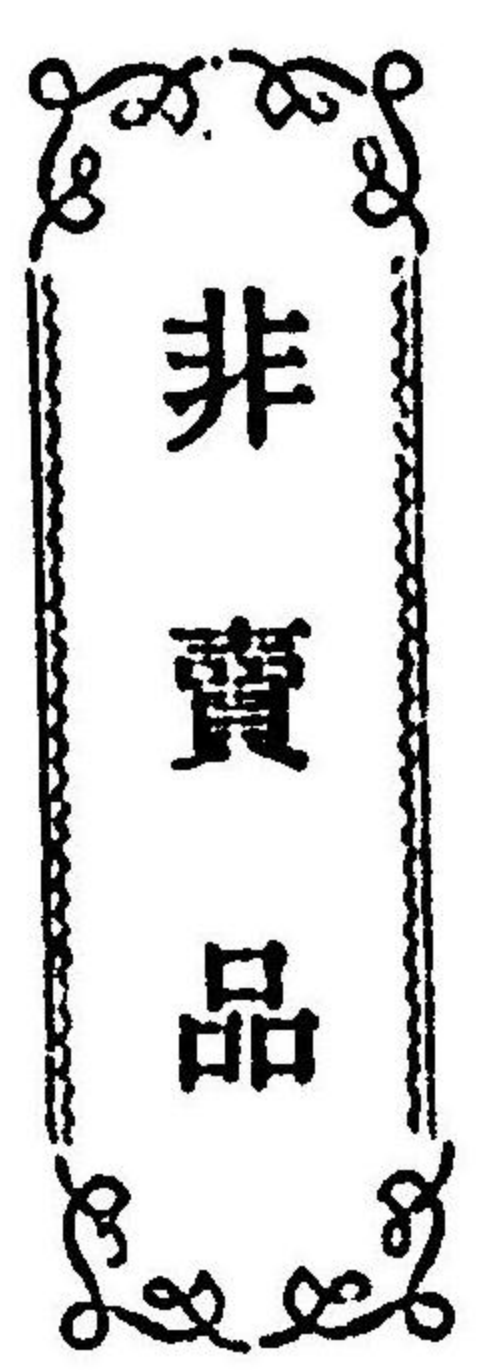
三 島 宇 一 郎

神田區表神保町
二番地

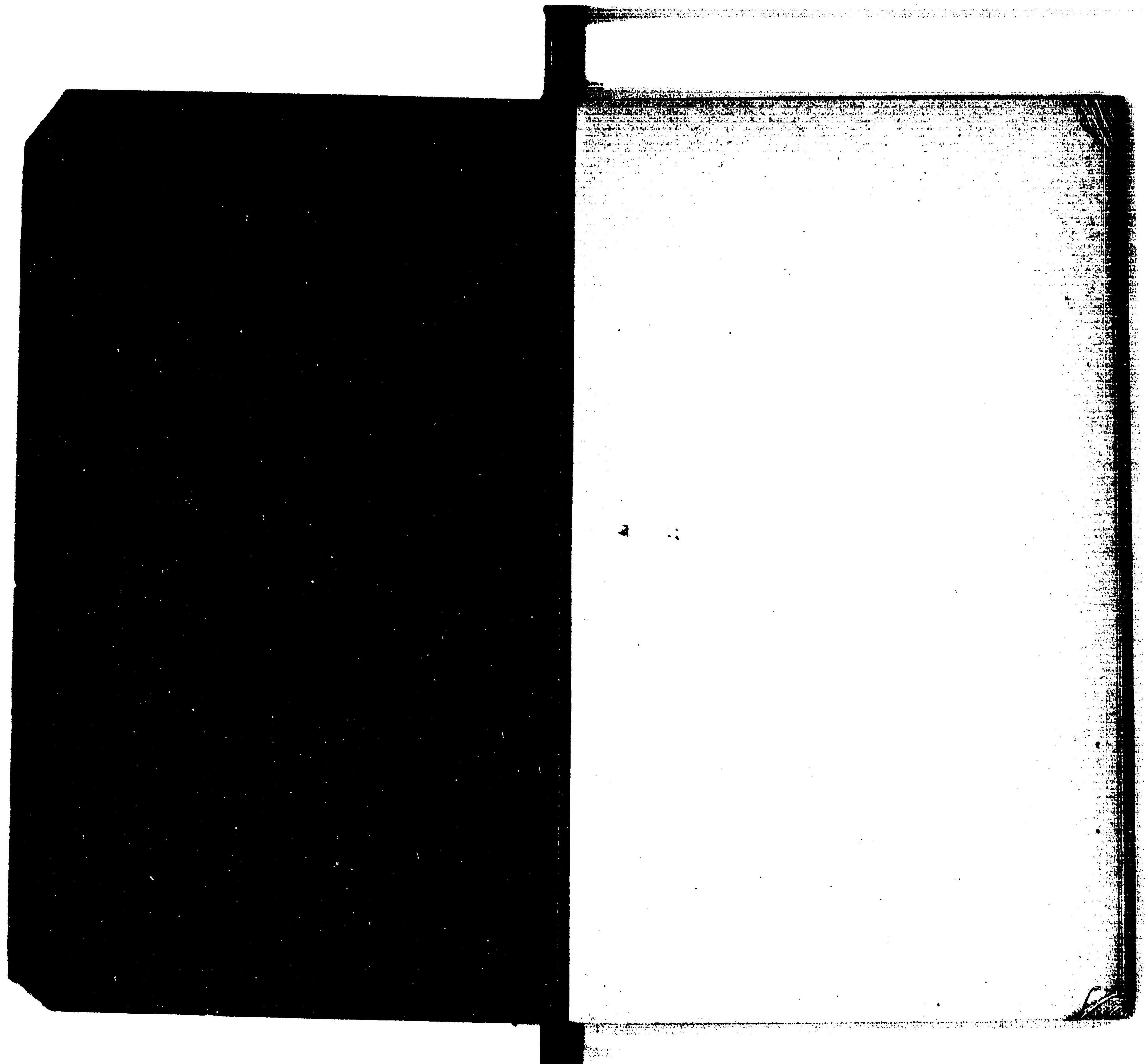
印刷所

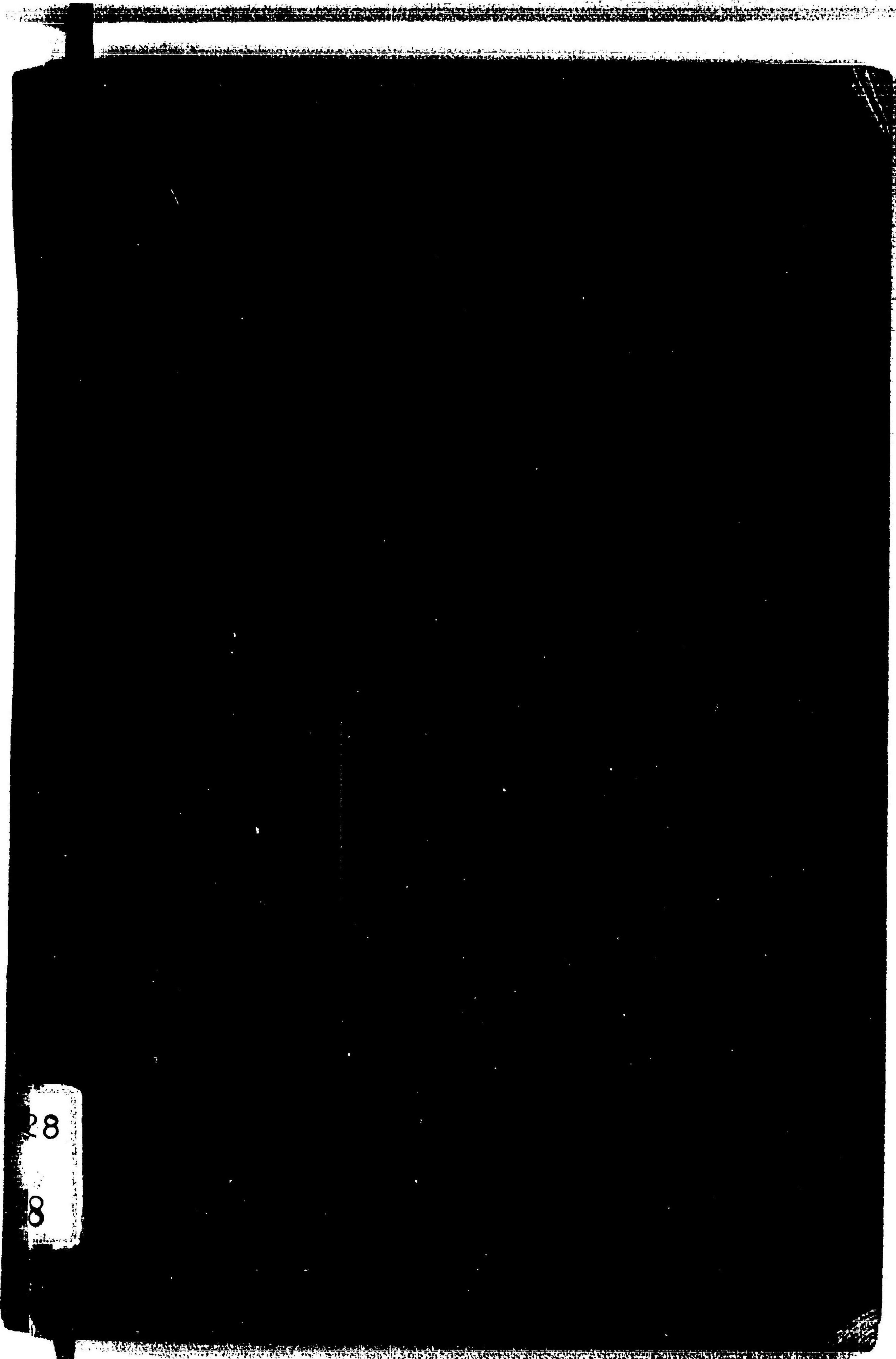
弘 文 堂

神田區表神保町
二番地



非 賣 品





28

8

150
117

039612-000-8

特28-898

上州慨言

木曾 三四郎 / 著

M26.8

BDA-0190



8